

救われるためには

マラナサ・グレース・フェロシッポ 菊地 一徳氏

今朝のテーマは、主題は「救われるためには」というものであります。救われるためにはどうしたらいいのでしょうか。一体何から私たちは、救われるべきなのでしょう。または、救われなければならないのでしょうか。そのあたりをまた聖書の中から皆さんに説明していきながら、その説明を皆さんもしっかりと把握して頂いて、受け止めて頂いて、正しく理解して頂いて、それを自分の言葉でも結構ですから、御言葉を使って一人でも多くの人たちに、救われるべき人たちに、救いを必要としている人たちに、お分かちして頂きたいと思います。一般的に救われるためには、あれもしなければいけない、これもしなければいけないと、多くの人たちはきっとイメージしていると思います。クリスチャンであればおそらくは聖書を読まなければいけないんでしょうね。勉強しなきゃいけないんでしょうね。そうしなければクリスチャンになれないのでしょうか。救われないのでしょうか。教会に通わなければ救われないのでしょうか。洗礼を受けなければクリスチャンにはなれないのでしょうか。いろいろな疑問もあつたり、思い込みもあつたりすると思います。ちゃんと献金をしなければ救われないとか。修行のようなもの、訓練のようなもの、苦行のような犠牲を払わなければ、救われないと。一般的にはそのように思い違いをしているところもあろうかと思えます。イエスの時代にもそのような考えが一般民衆の中に根付いておりました。ヨハネ 6:27~29 に目を留めて頂きたいと思えます。

27:なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子が(すなわちイエス・キリストが)あなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」

28:すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」(この質問を言い換えれば、私たちが永遠の命を得るためには、救われるためには、どうしたらいいのでしょうか、という質問です。今日のテーマです。)

29:イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること(すなわちイエス・キリストを信じること)、それが神のわざです。」

28 節で人々がイエスに質問した「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」の「神のわざ」は、原文では複数形です。英語の聖書でも”works”となっています。一方イエス・キリストが答えられた 29 節の「神のわざ」、それは単数形です。英語では”work”ということです。ですから 28 節の方では神のわざの複数形。一方でイエスが言っているのは「神のわざ」単数形です。たった一つのわざ、働きで良いのだと。それは、神が遣わした者、すなわちイエス・キリストを信じることで救われる、信じることで永遠の命を得るんだと。これはヨハネ 3:16 に於いても既に語られていることであります。

ヨハネ 3:16 と言えば、福音の要約というところでもあります。聖書の中で最も有名な聖句であります。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3:16)

この「世」というところに自分の名前を入れて読み直すということ、皆さんにもお勧めしております。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、(菊地一徳)を愛された。(私の名前です。)それは御子を信じる(菊地一徳)が、(ひとりとしては省略しても)滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。イエス・キリストを信じるだけで、私たちは救われます。永遠に滅びることなく、地獄に行くことなく、天国へ行くことができ、永遠の命を頂

くことが出来ます。シンプルです。それ以外のわざ、それ以外の働きは、不要です。人々は、何かいろいろなことをしなければいけないというふうに思っていたわけです。イエス・キリストを信じるだけでは、勿論不十分だと思っていたわけです。聖書をもっと読まなくてはいけないのではないのでしょうか。教会に通わなければいけないのではないのでしょうか。洗礼を受けなければいけないのではないのでしょうか。献金をしなければいけないのではないのでしょうか。そうでなければ、救われないのではないのでしょうか。しかし、シンプルに福音というものは、イエス・キリストをただ信じるだけで、人は永遠の命を得て、救われるということでもあります。たった一つのことだけです。特別な努力は要りません。誰にでも出来ることです。大人でなくても子供でも出来ます。働けない人でも、体が動かない人でも、誰にでも出来ることです。もう一つヨハネの福音書から離れて、使徒の働き 16 章に目を留めて欲しいと思います。30 節と 31 節をお読みしますので、聞いて頂きたいと思います。

30:そして、ふたりを(ふたりというのはパウロとシラスのことです。イエス・キリストの御名によって福音を宣べ伝えたとかどで彼らは投獄されてしまいました。勿論それは不当な逮捕です。不当な投獄でありましたが、でも神の驚くべき御業がなされたわけです。)外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。(今日のテーマです。)

31:ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。(主イエスを信じれば救われる。「そうすれば」というところがちょっと問題の訳になっていますけれども、直訳は「そして」ではありません。)

「主イエスを信じなさい。そして、あなたも救われます。主イエスを信じなさい。そして、あなたの家族も救われます。」それが真意であります。「そうすれば」というところを誤解してしまって、一人の人がクリスチャンになったら、家族全員が自動的にクリスチャンになるというのは、間違いであります。主イエスを信じなければ、誰も救われません。個人個人がイエス・キリストと個人的な関係を持たなければ、父なる神様とつながりを持つことは出来ません。神の子どもとされることはありません。すなわち、クリスチャンになることも、救われることもないということです。主イエスを信じること、これが神のわざで、この一つのことだけが私たちに求められています。それ以外には何も求められていません。

使徒の働き 2:37~38 を、お聞き頂きたいと思います。ペテロが説教しました。それに対しての人々の反応です。

37:人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。(これも今日のテーマです。救われるためにどうしたらいいのでしょうか。)

38:そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

今まで開いた 3 箇所。これは全部同じ内容を語っているところであります。ただ言葉遣いは異なっていますが、本質的には同じことを言っています。ペテロの答えとして「悔い改めなさい。」と言われてますが、この「悔い改めなさい。」という言葉は、実はイエス・キリストがその公宣教において、最初に発した言葉でもあります。宣教の第一声が「悔い改めなさい。」であったんです。マタイ 4:17 にそれが、記録されています。

この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

「悔い改めなさい。」というのは、ギリシャ語で“metanoeo”(メタノイア)という言葉で、文字通りは、『考え方を変える。方向転換する。』これは、罪の方向から、滅びへ向かう方向から、神へ向かう方向に方向転換する。今まで神抜きで

生きてきた自己中心的な生き方というその考え方、その価値観から、神中心への考え方、神中心に生きるその考え方に変えていくということが、悔い改めるということでもあります。そして、そのために必要なことが、罪というものを認識するということです。この罪の指摘、これがなされなければ、人々はいったいどこから神に立ち返るのが分かりませんし、何から救われるのかも分かりません。救いの必要性すら思わないわけです。罪さえ分かれば、すぐにでも「私はこの罪からの救いが必要です。だれがこの私を救ってくれるのでしょうか。救い主がおられれば是非その方に救って頂きたい。」と、自然に願うようになります。しかし、罪が分からなければ、救いなんて説かれても、ピンとこないわけです。この罪の認識が大事であります。ペテロも「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」と、答えております。聖書の中で、『罪』という言葉が沢山使われていることに、皆さんお気付きになっていると思います。にも関わらず私たちは、人に聖書の話や福音を宣べ伝える際に、又はイエス・キリストのことを伝える際に、なかなか『罪』という言葉の口にしません。何故そうしてしまうかという、『罪』なんてことを言うと、聞いている者が不快な思いをするのではないか。「あなたは罪人です。」なんてことを言ったら、逆切れされて、そして、もしかしたらもう口も利いてくれないのではないか。だから極力『罪』なんてことは口にしなくて、あんまり否定的な、ネガティブなことは口にしなくて、もっと例えば「神は愛です。」とか、もっとやわらかいアプローチで、もっと彼らの気分を良くさせるような、喜んでもらえるような、そういう言葉を敢えて強調したり、そういうことばにすり替えて、私たちは神様のことを語ろうとしてしまうかもしれませんが、でも聖書の中で『罪』という言葉がどれほど多く使われているかを知るならば、私たちは考え方を改めなければならないかと思えます。ちなみに『罪』を英語では”sin”と言います。この”sin”という言葉は、聖書 66 巻全体で見ると、全部で 448 回使われています。その一方で先ほど触れました『愛』という言葉、英語では”love”、この言葉は聖書 66 巻で何回使われていると言いますと、311 回です。『罪』の方が多く使われているのです。『罪』という言葉は 448 回、しかもそれは”sin”という言葉だけです。他にも聖書には『背きの罪』『咎』『背信』とかいろいろな言葉が罪のいわゆる同義語というものが使われていますから、そうしたものを合算すれば、膨大な数になります。物凄い回数で聖書は、私たちに対して「あなたは罪人です。」と語っているわけでありまして。『愛』という言葉の方が少なく使われているということを感じて欲しいと思えます。イエス・キリストの宣教の第一声は、「悔い改めなさい。」だったと言いました。そして、それ以降の宣教のアプローチもやはり先ず罪の指摘から始まったわけです。例えばヨハネの福音書4章を見て頂くと、サマリヤの女に対してイエス・キリストは福音を宣べ伝える際に、先ず彼女の自堕落なライフスタイルから指摘しました。彼女には渇きがありました。でもその渇きの原因は、彼女のその罪深いライフスタイルからきていたわけでありまして。男性遍歴が彼女にはありました。そのような性的不道德の罪というものが彼女に恐ろしいほどの渇きをもたらしているんだということを、イエスはあからさまに指摘しました。そこを見抜いて「あなたには渇きの満たしが必要でしょう。そのためには、あなたは渇きの原因を認めなければいけません。」何から救われるべきなのか。そしてその原因は罪であるということイエスは指摘されて、その罪を何とか出来るのは、その罪を除去出来るのは、救い主イエス・キリストだけであるということ宣言されるわけです。罪の指摘がなければ、罪の認識がなければ、人は救いの必要性、救い主の必要性を感じません。これについて、皆さんの週報の方にも内村鑑三の言葉で紹介してあります。

「実に罪の何たるかを知らずして、キリストの誰なるかは到底分からないと信じます。」と週報の方に記してあります。また内村鑑三は「罪を発見することは、キリストを発見するに至るの道であります。罪の中の罪とは、神を捨て去ることです。盗むことも殺すことも姦淫することもこれにまさるの罪ではありません。皆これらの罪はすべて神を捨て去りし罪の結果として人の行為に現れてきたものであります。」と。これが罪というものです。先ず私たちは罪の話から始めなくてはなりません。

これからローマ人への手紙を皆さんに聞いて頂きたいと思えます。その中に福音が書かれています。その福音はやはり罪の指摘から始まります。ローマ 1:16 を先ずお聞き頂きたいと思えます。

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(ローマ 1:16)

『福音』というものは、『良い知らせ』というものは、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力であると言っています。その中に罪の話が、先ず初めに語られています。このローマ書を通して、人がどのように救われていくのか、その道程というものが、5つの聖句をこのローマ書の中からピックアップすることで、浮かび上がって、非常に分かり易く解説出来るということで、それを『ローマ書の道』として今日多くの人に知られて、活用されている、そのようなアプローチがあります。ローマ書に現れる聖句を追っていくことによって、その人個人の救いの道が現れるといったものです。その最初の道が、「罪を指摘する」ということから始まります。それが福音の始めであります。「悔い改めなさい。」とイエスが言われたことと全く同じ内容となっていますが、その始めがローマ 3:23 からスタートします。それが5つの聖句の内の第1であります。『ローマ書の道』の第1地点と言っていると思います。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない、といった内容です。

このことを先ず私たちは告げなければいけませんし、私たちも罪人であるということを先ず認識しなければいけません。この中にこれまで生まれてこのかた一度も嘘をついたことのない方はいらっしゃるでしょうか。勿論そんな人はいないと思います。これまで一度も他人の物をとったことがない人は、この中にいるでしょうか。誰もが罪人であるということは、否定出来ない事実だと思えます。でも実際に多くの人は自分の罪になかなか気付きませんし、それを認めようとしません。ちょっと汚い話になるかもしれませんが、尿検査の時に皆さんは自分の尿を紙コップにいれるわけです。それをあなたは飲めますか。普通はちょっと抵抗を感じるわけです。でもその尿は、あなたの体の中から出てきたはずで、なにも、体の外に出た途端に、それを目にした途端に、あなたは嫌悪感を感じるわけです。尿と言わず例えば唾だったらどうでしょうか。唾、今も口の中にあります。飲み込んだりします。でもその唾を紙コップに吐いてみて下さい。それをあなたは眺めてみて下さい。5秒くらいしてから飲み込んで下さいと言われたらどうでしょうか。抵抗を感じますね。しかし口の中にある限りは、あなたは見ていないので平気で唾を飲み込みます。それを出して目にした途端に、あなたはそれを飲み込むのに抵抗を感じます。人がなかなか罪を認められないのは、自分の罪を客観的に見る事が出来ないからであります。自分の内側にあるのでそれが見えないのです。でもそれがひとたび外へ出た途端に、ハッキリしてくるわけです。それがどんなにおぞましいものか、どんなに汚いものか分ってくるわけであり、だからなかなか人は、自分に罪があると、自分が罪人であるということを認められないという傾向があります。

もう一つ聖書でいう『罪』というのは、一般で認識される『罪』、若しくは『犯罪』というものと異なるということも認識しなければいけません。多くの人たちは、罪の定義を勘違いしています。罪と聞くだけで、「それは犯罪行為ですね。私は別に法律に触れるようなことはしていません。嘘はついたことはありますけれども、それが犯罪になるんですか。でも、別に私は警察にまだ捕まったことはありません。起訴されたことはありません。」とか。そのようにして、自分が犯罪者ではないということから、罪人ではないと誤解してしまう人もあろうかと思えます。でも聖書でいう罪とは、そのような人間が作った法律を犯したことを指すものではありません。それも含めてますけれども、人間の法律というのは、それぞれの国によっても異なるわけです。ある国ではそれは必ずしも犯罪とは言えないかもしれませんが、人の基準、人の価値観によって法律も定められて、それがよし悪しということも人の良心によって大分異なってくるわけがあります。すなわち人間の作る法律というものは、絶対的なものではないということです。絶対的な基準ではないということです。神の定めた法律というものが、それは絶対的なもので、普遍的なもので、どの国においても、どの民族においても、どの世代においてもそれは通用するものであります。その神の律法、これに違反したことを罪と

いうわけです。また『罪』という言葉は、ギリシャ語では「ハマルティア」"hamartia"と言いますが、それは「的外れ」という意味です。アーチェリーの競技で的を外すことを指す言葉であります。ですから『罪人』というのは言い換えれば、『ずれ人』というふうにも言えるかと思えます。ずれているのです。神の定めたスタンダード、神の的から外れた状態、それを聖書では罪と言います。先ほど嘘をついたことのない人はこの中にいますか、という質問をしましたけれども、小さな子供でも嘘をつくことを知っております。誰も嘘をつくように、親が教えたわけではないのに、いつの間にか子供は巧妙な嘘をついて、平気で親や友達をだますようになっていたり、平気で友達のをかっぱらってきたり、平気でお店から商品をポケットに入れて盗んできたり。誰も教えて無いはずなのに、いつの間にか幼子でもそのような罪を犯してしまいます。それを聖書では『原罪』と言います。英語では"original sin"と言います。それが聖書が言っているところの罪であります。すなわち人はすべて罪人であって、生まれながらに罪人であるということです。最初の人、アダムとエバは『神のかたち』に創られました。彼らには最初から罪はなかったのです。神の似姿に造られたと**創世記の1章2章**は記しております。『神のかたち』というのは神様に似ている、神様という方は、父なる神、子なる神、聖霊なる神、三位一体の神で、その神に似た存在として人間も三位一体的な存在として造られました。皆さんも三位一体的な存在です。どこがと思われるかもしれませんが、皆さんには肉体があります。そして目には見えませんが、皆さんには『魂』があります。『魂』とは皆さんの心の部分にある感情であったり、または思索の部分(英語では"mind"の部分) "emotion"の部分であります。精神の部分です。そしてもう一つの構成要素が『霊』であります。肉体と魂と霊。"body soul spirit"この三つによって人間は構成されています。そして特に『霊』の部分は、分かりにくいかもしれませんが、この『霊』の部分こそ実は目に見えない霊なる神様とつながることの出来る、コミュニケーションをもつことの出来る領域だったわけです。"だった"と言ったのは、罪を犯す前のアダムとエバは自由にエデンの園で神と共に歩き、神と共に会話が出来たわけです。ところが、神が食べてはならないという、それを食べたら必ず死ぬという、あの禁断の木の実、善悪の知識の木の実を彼らが食べてしまった瞬間に「必ず死ぬ」と言われた通り、先ず彼らの『霊』が死んだわけです。『霊』が死んだ途端に、彼らは神様と自由に交流が持てなくなりました。神との関係を失ってしまったわけです。神のかたちというものも、破壊されてしまいました。神との関係を失ってしまったんです。それを聖書では、神学用語では、『墮落』と言います。その墮落した人間が、墮落した人間を生むようになったわけです。すべての人は生まれながらにして罪人である。すべての人は『原罪』を持っている。この『原罪』という認識は、三浦綾子さんの『氷点』という小説によって、だいぶ日本人の間にも浸透したと思えますが、生まれながらに罪人であるということは、これは否定出来ない事実だと、先ほども触れたばかりであります。子供に罪を教えなくても平気で罪を犯すわけです。その罪によって人は神との関係を失って、神と親しい交わりを持てなくなってしまったので、かつての満たしというものが失われてしまったわけです。かつては肉体においても、魂においても、霊においても全人的に満たされていたわけです。肉の渇き、それは食べ物や飲み物、または性欲といったものもありますが、すべては肉体の領域において癒されます。魂の渇き、言い換えれば精神の渇き、それも精神活動によって癒されたり満たされたり出来るわけでありまして。ところが霊の部分が死んでしまいましたので、霊は神との関係に関するものです。神を知ることの喜び、神と会話をすることの喜び、神と共に歩く、共に交わる、そのような渇きが完全に満たされない状態になってしまいましたので、人は喪失感を覚えるようになったわけです。何かが足りない、満たされない思い、何をしても虚しいという思いが、すべての人の中に植え付けられてしまったわけです。生まれながらに、何のために生きているのかも分からなくなってしまいました。「このままただ生きて、年老いて、死んでいく。死んだらすべてが終わってしまう。それが人生です。」と言われても、人間ならば合点がいかないわけです、納得がいかないわけです。結局死んだら皆同じだと、思ってしまったら、何をしても虚しいわけです。死んですべてが終わってしまう人生だったら、何の意味があるのでしょうか。あなたがそんなに頑張って、学歴を得たところで。あなたがそんなに頑張って、就職したところで。あなたがそんなに頑張って、結婚して子供を産んで、そして沢山の友達や、沢山の趣味や、また人のためになるような様々な事業を行ったとしても、慈善活動を行ったとしても、死んでしまったならば蓄えたお金も、あなたが積んできた経験もまったく虚しいとしか言いようがありません。死んだらすべて消えてしまう。それで納得いく人は、

多分ないと思います。もっと何かがあるはずだと。元々人間は、神様と交わることが出来たと言いました。その交わりは永続するもので、エデンの園にいた間、実は彼らは『いのちの木の果実』というものから、神との永遠の交わりを得ていたわけであります。その『いのちの木の果実』を食べている間は、彼らは神様と永遠に交わることが出来たわけですが、禁断の木の果実を食べてしまったその直後、彼らはエデンの園を追われて、いのちの木の果実を食べることが出来なくなりました。それがいわゆる失樂園であります。ですから、樂園を失った人々は、人間は、どこかにポッカリ穴が開いてしまって、もともと自分たちがいた世界、樂園を憶えるようになったわけです。もともと自分たちはそこから生まれてきた、そこから出てきたんだ、そこが故郷である、動物の帰巢本能に似ております。その帰巢本能というのは、人間で言えば、「天国への憧れ、理想郷への憧れ」であります。これは古今東西すべての人の中に植え付けられている、プログラミングされている思いと言っていると思います。伝道者の書にも『神は人の心に永遠を与えられた。』と言っておりますけれども、例えば仏教徒でも死んだら人は天国へ行くと思っております。仏教の教えの中に『天国』はありません。ただ『極楽』というものや『浄土』という教えはあります。桃源郷、ユートピア、またアルカディアとか、シャングリラとか、いろんな呼び名が世界中にあります。しかしそれらすべては、人の心の中に「死ですべてが終わるわけではない。何か死の向こうにあるはずだ。我々人類は、元々死ぬべき者として存在したのではなくて、永遠に生きる者として帰るべきところが本当はある存在として造られたんだ。」と、無意識の内にもどこかにそのような思いが、それは『神のかたちのかけら』が、そうしていると言っていると思います。人の中にあるわけです。そして、そのような思いを満たすために人は、例えば宗教をつくるわけです。「こうすれば天国に行けますよ。こうすれば救われますよ。こうすれば永遠というものを手に出来ますよ。」と。今日のテーマは、「救われるためにはどうしたらいいでしょうか」。これは、「天国へ行くためにはどうしたらいいでしょうか。」という質問でもあります。もともとそのような喪失感というのは、罪から来ているということをもっと覚えなくてははいけません。

そして、その喪失感、他にもただ死後の世界への憧れだけではなくて、現代の私たちの現実の生活の中にも現れてきています。先ほども話しましたが、何をしても虚しい、満たされない、何のために生きているのかも分からない、人生の目的は何ですかと問われても答えられない、ただ生きているだけです。どこかに不満があります。どこかに不安があります。ブレイズ・パスカルという人も「人の心の中には神でしか満たすことの出来ない空洞がある。」と、言いました。神でしか満たすことの出来ない空洞、それは罪を犯した結果、霊の部分が死んでしまったので、その死んでしまった霊は神によってでしか生き返らせることは出来ない、復活させることは出来ないということです。死人をよみがえらせることが、人間に出来ないように、死んだ霊をよみがえらせることは神にしか出来ないわけです。神にしかその部分を直すこと、回復させること、癒すことは出来ないわけです。私たちが造られた創造主である神様と出会うことなしに、私たちは自分の存在意義、人生の目的が分からないわけです。神によって造られた者であるならば、必ず何らかの目的をもって造られたわけです。偶然に生じたのではありません。進化論が説くように、創造者なんかいないんだ、すべての生命は偶然によって生まれたんだと。ビックバンで生じて、いつの間にか有機物がくっついてアメーバのようになって、そうしたらいろんな生物に進化して最終的には人間になりました。偶然に生まれたわけですから、存在意義はありません。偶然に生まれたものに目的などないわけです。ですから進化論を信奉している人たちは、どうしたって自分の存在意義を認めることも出来ませんし、命の尊厳すら認められません。ですから平気で人を殺せるわけです。平気で都合が悪くなれば堕胎出来るわけです。偶然に生まれたものだから、できちゃったから。そんなものには偶然性においては価値がないわけですから、平気で赤ん坊も胎児も殺せるわけです。少年少女が通り魔殺人を行っても、青年が人を急に殺したところで、「どうして殺していけないんですか。」と、「殺したかったから殺したんです。」と。狂気沙汰だと思いかもかもしれませんが、でも進化論の立場から言いますと、それでいいんです。なぜならば、すべてのものは偶然で生まれたわけですから、それぞれの人間には何の尊厳もないわけです。

でも聖書の考えに立ちますと、すべての人は神によって造られたわけですから、神のかたちに似せて造られていますから、神のかたちという尊厳があるわけです。だから人の命は尊いのです。その意味において私たちは、罪に完全に、その思いも、その心も侵害されて、汚染されてしまって、麻痺してしまって、創造者が見えなくなってしまう

て、生きる目的も失ってしまって、ちょっとだけ『神のかたち』のかけらがあって、それが永遠への思いであったり、それが例えば『良心』(良い心と書く良心です。)というもの、それが『かけら』です。罪悪感を感じるわけです。これはやってはいけないことだと、漠然としたそういう良心の呵責(かしゃく)があるわけです。「これは悪いことだ」、子供にもそれがあつたわけです。でも良心がいくら痛もうとも、私たちはその良心に従って正しく振舞うことは出来ません。またその良心ですら、麻痺してしまうこともあるわけです。あなたの良心と私の良心は同じではない。それも絶対的な基準にはならないわけです。そのような罪がもたらした弊害というものを、人間は何とかしようとして宗教を作つて、その穴埋めをしようとするわけです。天国の約束をして気休めを与えようとする。またはある人は虚しさ、満たされない思い、それを仕事で、キャリアで満たそう、ある人は異性によって満たそう、不特定多数の人たちと付き合つたりして、また結婚すれば幸せになれる、満たされるとか、子供さえいれば幸せになれるとか、穴埋めをしようとするわけです。沢山趣味を持てば、沢山娯楽を持ってギャンブルに興じていけば、その虚しさから解放される。薬物に頼れば、アルコールであつたり、ニコチンであつたり、また覚せい剤であつたり、または抗うつ剤であつたり、眠剤であつたり、そうした薬に頼れば満たされる。ポルノであつたりですね、いろんなものに人は心の満たしを求めようとする。ポツカリ開いた穴を、神でしか満たすことの出来ないその空洞を何とかしようとして躍起になるわけです。それは建設的なものあれば、破壊的なものもあるわけです。沢山良い行いを積んで、慈善活動をして、ボランティア活動をして、何とかこの虚しさを埋めよう。宗教活動をしたり、社会において害のないようなかたちで行っていくものもあれば、完全に破壊的に、退廢的に薬物やギャンブル、ポルノといったものに陥っていく者たちもあるわけでありませぬ。いずれにしても共通していることは、その渴きを満たしたい、その穴を埋めたい、という思いであります。でもやはり何をしてても虚しいというのが実態であります。

それに対して聖書は、明確な解決を与えております。心の中において、「自分は完全ではない。罪人である。どこか後ろめたさがある。罪悪感・罪責感、責められる思いがある。赦されていないんじゃないか。」そういう思いが常にあつて、それが心を重くして、そして私たちが神から一層引き離してしまうわけですが、もう一度かつての罪のなかつたあのエデンの園に私たちが帰すようにして、罪のない神様と自由に交われたその本来の姿に回復させようとして、神は唯一の手立てを私たちに講じて下さいました。その唯一の手立て、唯一の救い、それこそが独り子イエス・キリストをこの世に送るというものであります。これはどうしても人間には出来ないことであります。人間が自分の力で天国に行けない限り、天国にいる神様がこの地上に降りてきて、この罪の世界に降りてきて、私たちに救助の手を差し伸べる以外に、術(すべ)は無いわけです。**使徒 4:12** にこう書いてあります。

この方以外には、だれによつても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」(使徒 4:12)

この方というのは勿論「イエス・キリスト」のことです。イエス・キリストご自身の言葉としてはヨハネ 14:6 に

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ 14:6)

父なる神様、すなわち天国に行くことは、イエス・キリスト以外に道は無いと。

先ほどローマ書の道の第1地点を見ました。先ず罪を認識することから始まると言いましたけれども、それはイエス・キリストへ向かつて行く道でもあります。罪が分からなければ、救い主の必要性を覚えないからであります。そして、そのローマ書の道は5つの聖句によつてつなげられているということに触れましたので、残りも説明しておきたいと思いますが、最初はローマ 3:23 と言いました。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない、というものです。

次に第2地点としてローマ 5:8。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。(ローマ 5:8)

あなたがまだ罪人であったとき、イエス・キリストなど知らなかったとき、神なんか信じないと背を向けてあなたが最低最悪だったとき、そのとき既に神はあなたのことを、この上なく愛していました。こよなく愛していました。独り子イエス・キリストを与えるほどに。

次にローマ 6:23

罪から来る報酬は死です。

続きもありますが冒頭の部分だけ。罪には必ず刑罰が伴います。神の律法に違反する罪の結果は死です。この死というのは、肉体の死だけを指すではありません。この死というのは、第2の死または永遠の死、永遠の滅びと呼ばれるものです。端的に言えば、地獄に落ちるということです。罪がある限りはあなたは天国へは行けずに、地獄に行くということです。それは困ったなど、地獄にだけは行きたくないと思う人も必ずいるわけです。

それに対してローマ 10:9 で、救いの手立てが明らかにされています。救いの唯一の方法です。唯一の道です。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。(ローマ 10:9)

イエスを死者の中からよみがえらせて下さったと信じるとは、どういった信仰かと言いますと、神の子イエス・キリストがあなたの罪を十字架の上で負って下さって、死んで下さって、葬られて下さって、さらに3日目によみがえって下さった。あなたの罪を贖うために。あなたの罪をすべて背負って処理して、完全に赦して、完全に聖めるために、十字架の死から埋葬、復活をイエスは通って下さったということです。あなた個人の救いの為に、イエスがすべてを成して下さった。そのことを信じるならば、あなたは救われるからです。心の中で信じて、それを口で告白するだけで、それだけであなたは救われます。それだけであなたはクリスチャンになれます。

「でも私には実感がありません。本当に自分が救われているかどうか分からないんです。」

ローマ 10:13 を見て下さい。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。(ローマ 10:13)

『**だれでも**』という言葉に注目して下さい。この『**だれでも**』の中には、だれが含まれるでしょうか。あなたが含まれるでしょうか。勿論含まれますと、日本語が読めれば分かると思います。救いの実感があろうとなかろうと、だれでも救われるのです。もしあなたが主の御名を、イエスを主と信じるならば、呼び求めるならば、あなたは救われます。救いの実感があろうとなかろうと、あなたが何者であろうと、あなたの過去がどうであろうと。まだあなたが罪人だったときから、神はあなたのことを本当に愛していたのです。一番大事な、自分の命よりも大事なイエス・キリストを与えるほどに愛していたんです。ならば、イエスを信じたあなたは、神から愛されないなんてことは、絶対にありえないことです。

イエスを信じていなかったそのときからあなたは、愛されていたわけです。イエスを信じた途端に、あなたは神の子どもとされます。キリストの花嫁とされます。実感があろうとなかろうと、それが事実であります。だれでも救われるのです、とあります。それが聖書で説くシンプルな福音であります。『ローマ書の道』というもので、これについてもっと詳しく私は以前に主題説教をしておりますので、インターネットにもアップロードされていますし、CDにも焼かれていると思いますから、もっと詳しく知りたい、学びたいという方は、『ローマ書の道』というタイトルのメッセージを探して見て下さい。主題説教の中に入ってます。そのような福音を私たちは信じて、救われて、今ここに集められております。

でも今日、強調したいことは、真っ先に第一声として私たちは、罪を指摘して、そして罪からの救いの必要性というものを、相手に感じさせなければいけません、伝えなければいけません。C・S・ルイスという人の言葉が、今私が話したことを上手にまとめてくれていますので、その名言を紹介したいと思います。

キリスト教は人々に悔い改めを命じ、かつ赦しを約束する。したがって悔い改めなければならないようなことはやめた覚えのない、また赦してもらい必要を感じない、そういった人々に対しては、キリスト教は語るべき言葉を全く持っていない。悔い改めることなしに、「あなたのもとに引き返らせて下さい。」と、神に求めるのは、引き返すことなしに「引き返させて下さい。」と求めるのと同じである。

ナンセンスなことですね。罪については、C・S・ルイスはこう言っています。

自己と言うものを意識した瞬間(自分のことですね。)、自分が何よりも一番可愛い、自分が世界の中心になりたい、いやハッキリ言って神になりたい、というそういう気持ちを抱く可能性が生ずる。これがまさにサタンの罪であり、またサタンが人間に与えた罪だったのである。我々は、傲慢である間は、決して神を知ることはできない。傲慢な人はいつも事物や人々を見下している。見下している限り、自分の上にあるものが目に入らないのは、当たり前である。

なかなか信じないという人があるわけです。でもその人たちは、実際には高慢なだけかもしれません。自分が一番上にいるので、自分より上のものが見えないわけです。なかなか信じないのは、なかなか罪の認識が出来ないからだということも指摘しました。内側にある、自分の内にあるその罪が客観的に見えないからと、また聖書のいう罪が分からないからだという話もしましたが、それだけではありません。高慢であるということに加えて、なかなか信じない、または「私は信じられないんです。」と言う人、彼らは実際にはすべて分かった上で、本音は「信じたくない」というのであります。このことも皆さんの心に留めておいて欲しいと思います。ポール・リトルという人は

人は信じる事が出来ないのではなく、信じようとしていないのである。

という言葉を残しております。ポール・リトルという人は、キリスト教の弁証論のエキスパートであります。その彼が「もしキリスト教が合理的であり真実なものであるとするなら、何故最も高い教育を受けた人々がそれを信じないのか。こういった質問はしばしばなされる。答えは簡単である。彼らは大部分のそんなに教育のない人々と同じ理由で信じないのである。彼らは信じたくないのである。これは知力の問題ではない。なぜなら芸術や科学の領域に傑出したクリスチャンがいるからである。これは先ず第一に意思の問題なのである。」

ヨハネ 3:16~21 に今言ったことも、イエスの言葉によって表現されております。先ほどはヨハネ 3:16 を読みましたけれども、福音の要約というところでは、

16:神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

その続きを見て欲しいと思います。17節から

17:神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

18:御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。

19:そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かつたからである。

20:悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

21:しかし、真理を行ふ者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

ポール・リトルが指摘しているように、人は信じる事が出来ないのではなくて、信じようとしぬ、または信じたくぬというのが本音であります。信じてしまったら、自分の悪い行いが出来なくなってしまうからです。クリスチャンになったら自分のやりたい事が出来ない、ライフスタイルを変えなきゃいけない、この自堕落な生活、これを改めなければいけない。そう思つて「目に見えない神など信じられないですよ。」とか、いろいろな理由を持つてきては、「クリスチャンたちは、キリスト教徒たちは、狭い考で唯一の神しか認めぬ。非寛容的である。キリスト教徒たちは皆戦争ばかりしているから、だから信じられない。」とか、いろいろな理由をくつつけてきます。でも本当は彼らは、それは言い訳に過ぎぬことで、本音の部分では信じたくぬだけあります。すべての彼らの疑問を解いたところで、すべて彼らが矛盾だと思つていることを解消してみせたところで、彼らは素直に信じようとしません。質問してみして下さい。「もしあなたが今ネックになっていると、それを根拠に信じぬというものに対してすべて答えたならば、あなたは信じますか」と、その人たちに聞いてみて下さい。多分その人たちは、「否、それでも信じぬ」と言うと思います。私はそういう人たちと沢山出会つてきました。彼らの疑問にすべて答えても、結局は信じたくぬというのが彼らの本音ですから、信じる事が出来ないという理由をすべて無くして、すべての根拠を信じる事が十分出来る妥当な理由を与えたところで、彼らは結局は出来ないのではなくて、したくないということを行うのであります。ですからなかなか私たちはそれ以上アプローチも出来ませんし、それ以上強制することもプッシュすることも出来ないわけですが、でも救いというのは人の働きではありません。知力の問題でもないというふうにも先ほどポール・リトルという人が言いましたけれども、救いというのは、その死んでいた霊がよみがえるということによつてなされるものですから、それは人の知力によつて、人の努力によつては絶対に実現出来ないものです。死人を人間の頑張りだとか、人間の技術だとか、人間の能力によつて成すということが出来ないのとまったく同じように、人の霊をよみがえらせる、人を救うということは、人間にはどうにも出来ないことです。どんなに一生懸命教会に通つても、どんなに一生懸命聖書を読んでも、勉強しても、苦行や修行を積んでお布施をしたところで、人は救われぬです。あなたが代わりにやつてあげたとしても、それでも人は救われません。どんなに分かりやすく福音を説いたところで、ぐうの音も出ぬほどに、疑い深い人たちにすべて信じられるだけの根拠を並べることが出来たとしても、論破出来たとしても、その人たちをあなたが救うことは出来ません。あなたの論理が人を救うものではありません。あなたの弁証論が人を救うではありません。人を救うのは神であります。イエス・キリストが唯一の救い主であります。そのことをあらためて皆さんも覚えて頂いて、「今まで沢山の人たちに福音を語つてきたけれどもなかなか人々は良い反応をしてくれぬ。私は家族で唯一のクリスチャンです。家族に何度も何度もイエス・キリストのことを話をしています。福音も伝えています。いろいろな福音の解説をした分かり易い小冊子やトラクトも配つてきました。聖書もプレゼントしてきました。なのに彼らは全然良い反

応をしてくれません」。でも、もしかしたらあなたは、避けては通れない『罪』という問題を棚上げにしまって、もしかしたその罪をなにかオブラートみたいなもので覆って、ぼやかしてしまって、そしてただ単においしい部分だけ、ただ信じれば救われるという話だけをして、ただ信じれば天国に行けるだけの話をして、それで済ませてはいなかったでしょうか。そのことを今朝考えて頂きたいと思います。

スタートを誤ればゴールは出来ません。間違ったスタートをしている限り、あなたはゴールを望むことはできません。正しくゴールへと向かうことができません。まず罪の指摘、これは必ずしも歓迎されることではないと思います。あなたも言いつらいと思いますし、人も歓迎はしないと。むしろ不快感を露わにして、嫌悪感をむき出しにして、「そんなこと失礼だ。初対面の私に。自分だって罪人の癖に、私のことを責めるのか。」とか、いろんなことを言われて、くじけてしまうような思いにもさせられるかもしれません。でも、この先ず第1地点としての罪の問題をハッキリ伝えない限りは、何を言ったところで、いくらヨハネの福音書の3章16節を語ったところで、あなたは何の手応えも得ないと思います。そのことを先ず、欠けていたと思う人は、行って頂きたいと思います。罪のことはあまり語っていなかったなど、あまり強調してなかったなという人が、心当たりがある人がこの中にあれば、是非先ずはそのことを前面とは言いませんけれども、先に言って欲しいと思います。断罪目的で言うものではありません。そうではなくて、先ず罪が分からなければ、神の恵みも分からないわけです。罪人に対して神がどんなに素晴らしい救いを用意して下さっているのか。罪が分かれば分かるほど、恵みの大きさ、深さ、豊かさが分かるわけです。こんな罪汚れた者に対して、こんなふさわしくない者に対して、神様は罪のない独り子イエス・キリストを与えて下さったんだと。罪が分からなければ、イエス・キリストの価値も分かりません。イエス・キリストがなされたことに特段意義を見出さないわけです。でも自分の罪が分かると、本当に有り難いと思うわけです。神様がこんな私をも愛して下さい。これは驚くべき恵みです、というふうに思えるわけでありです。今日は、簡単にこのぐらいで終わりにしたいと思うんですけど、そのことを心に留めた上で、「あまり私は人に対して福音を語っていなかったな。」と、まだ一度もまともに福音を語ったことがないという人もこの中にあるかもしれません。または「語っていたつもりです」と。罪のことは実はほとんど触れていませんでした、言及していませんでしたと。その人は語っているようで、実は語っていません。伝えているようで、実は伝えておりません。「でも私はその代わり祈っています。」と言う人もあるかもしれません。でも、祈っているだけではいけないのです。というのは、ローマ 6:14~17 にこう書いてあるからです。これは、聞いて頂ければ結構ですので。ちょうど『ローマ書の道』の最終地点がローマ 10:13 でありましたけれども、その直後の話です。

14:しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じる
ことができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。

15:遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

そうです。あなたが伝えなければ、あなたの家族も友人も、あなたが愛しているあの人たち、この人たち。あなたが伝えなければ、誰が伝えるんですか。「私は祈ってます。」それも勿論大いに奨励したいことですがけれども、祈っているだけではなくて伝えることも必要であります。16節のところには

16:しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。

17:そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

御言葉を伝えなければ、信仰は始まりません。信仰は聞くことから始まるのです。話してあげることがなければ、伝えることがなければ、伝道しなければ、分かち合いをしなければ、その人はいつまで経っても信仰を持ちませんし、い

つまで経っても救われません。「私は特別な訓練を受けていないから、私は聖書を全部読んだこともないし」。それを理由に逃げ回っている人もこの中にあると思います。でも実際には福音はシンプルなものです。あなたに福音を伝えてくれた人もあったはずであります。彼らはもしかしたらろくに聖書を読んだこともない人たちだったかもしれませんし、特別神学的な知識や訓練を受けたことのない人たちだったかもしれません。必ずしもすべての人が伝道者だとか宣教師だとか牧師によって救われているわけではありません。ちょっとしたことがきっかけで福音に触れて信じる決心ができた。あなたも勿論そのようなちょっとしたきっかけになれるわけでありませぬ。ただ聖書の言葉を伝えるだけでも、『ローマ書の道』をその人に伝えるだけでも、実際にその人の前で開いてあげて「ここにこう書いてあります。」と指をさしながら、いっしょに読むだけでも、十分福音伝道は出来るわけでありませぬ。テクニックなど要りませぬ。だれにでも出来ることであります。ですから、これも「出来ない」じゃないです。信じる事が出来ないのと、伝える事が出来ないのと、実は理由は同じです。信じる事が出来ないのではなくて、信じたくないからだと言いましたが、伝道する事が出来ないと言っているのは、実は伝道したくないというのが本音であります。前にもこの話をしたことがあると思ひます。無神論者のペン・ジュリエットという人の話です。ペン&テラーというマジックを行うエンターテナーです。マジックショーを行う有名な人ですけれども、そのグループのそのペアのペン・ジュリエットという人は、公の場で自分が神を信じない無神論者だと公言している人です。その人がある逸話を語っています。

親切なあるクリスチャンのビジネスマンが自分のマジックショーのあとに、聖書を持ってきて、これはギデオンの贈呈の聖書ですけれども、ニコニコしながらペン・ジュリエットに渡したそうです。その行為をペン・ジュリエットは非常に高く評価しています。神を信じていないのに、人から伝道してもらって、聖書をプレゼントしてもらって、この無神論者は喜んでるわけです。何故かと言ひますと、「俺は今までずっと伝道しない人なんて尊敬しないと言ってきた。(これは公言しているんですが)、全然尊敬出来ないね。もしあんたが天国や地獄があると信じているなら、また地獄に行ったり永遠の命を持てなくなったりすることがあると本当に信じているのなら、如何なる場合でも伝道するはずだろう。伝道すれば社会ではやりにくくなるとか、相手は俺に構わないで信仰は自分の物だけにしてくれよ、なんていう無神論者が言った理由で伝道しないのなら、それはおかしい。永遠の命があることを知っただけで、それを伝えないのは、その人を憎んでいるのと同じだ。どれくらい憎しみを持てば、伝えないでおられるのかな。例えば、トラックが前方から走ってきて君を轢きそうになる。俺なら君が引かれる前にタックルして君を助けるよ。伝道するかどうかは、トラックに轢かれそうになっている人を助けるかどうかよりも、もっと重大なことだろう。

と、無神論者が言っています。そこまで思うのなら是非信じて欲しいというのが私の願ひですけれども、でも彼の言っていることは、すべての的を射ていると思ひます。伝道しないクリスチャンは、愛してないんです。家族に伝道したことがない、親戚に伝道したことがない、友達に福音を宣べ伝えたことがない、友達にも誰にも言っただけ。その人たちのことを、あなたは一つも愛していません。地獄に行っただけ構わないとあなたは心のどこかで思っただけ。その人たちが地獄へ落ちようと、私はその人から嫌われたくないから、その人たちのことなど微塵も愛してないけれども、私は自分のことを一番愛しているから、変な人に思われたくないから、馬鹿にされたくないから、人間関係を失いたくないから、だから私は福音を宣べ伝えないんです。特に罪については語りませぬ。親に対してまだ福音を伝えてないならば、親を全く愛してない人です。地獄に落ちて構わないと思っただけの人です。子供に対してあなたはまだ福音を語っただけならば、あなたの子供に対して「おまえは天国へ行かなくていい。地獄へ落ちて構わない。」友だちに対してもそうです。口ではあなたは「愛している」と言うかもしれませんが、でも実際に伝道しないということはそういうことを意味しているんです。彼らはこのままでは地獄に落ちて行くんです。イエス・キリストを知らなければ、自分の罪の中に死んでいくだけであります。なのにあなたは、福音を語れば友だち関係を失うかもしれない、親子関係を失うかもしれない。それは地上の話です。永遠においてはどうでしょうか。永遠にあなたは親子関係というよりも家族関係を失って構わないと思っただけでしょうか。自分は天国に行く。でも家族はどうでしょうか。そのこと

を最後にチャレンジとして皆さんに伝えておきたいと思います。確かに言いづらくもかもしれません。確かにそれはハードルが高いことかもしれません。でもあなたが本気で家族を愛しているならば、友だちを愛しているならば、同僚を愛しているならば、是非、永遠の命がただでこんなにもシンプルな方法で得られるということを伝えて欲しいと思います。全然その気になっていなくても、全然関心を持ってもらえなくても、罪についてハッキリ伝えるならば、きっと考えてくれると思います。悔い改める者もあれば、食ってかかってくる者もあると思います。どちらか一方のリアクションかと思いますが、それでもめげずに語って欲しいと思います。イエス・キリストの他に希望はないと信じていて、わずかでも愛や親切心を持ち合わせていたら、この救い主に向けて人々を引き連れてこようと躍起にならないではいられないはずだと、マイケル・グリーンという神学者が語っています。本気であなたが家族の永遠の運命のことを心配しているならば、もうまさにダンプカーに轢かれそうだという家族を目の前にして、助けられるはずなのに助けないでいるのは、一体どういうことでしょうか。是非、警告もして頂きたいと思います。津波が来ることが分かっているのに警告しない。地震が来て建物が倒壊して死ぬことが分かっているのに警告しない。あり得ないことです。イエス・キリストを信じなければ、このままでは天国に行けない、地獄に行って永遠に苦しんで、永遠に滅びることが分かっているのに、それを警告しない。もっとあり得ないことです。このことを伝道しない、伝道する必要がない、と思っている人たちに伝えたいと思います。あなたには愛のかけらもありません。ハッキリと伝えておきたいと思います。義務だからじゃないんです。しなきゃいけないことじゃないんです。あなたが家族を愛しているならば、そうせざるを得ない、躍起にならざるを得ないという話をしているんです。皆さんに私は一切強制はしませんけれども、あなたの中に神の愛、神の恵み、イエス・キリストがあなたのためにどれほどのことをして下さったのか、そのことがしっかりと実感されているならば、焼き付いているならば、あなたは誰にも言われなくても、それが自然に出来るはずですよ。もしそれが出来ないならば、あなたは多分まだ罪の赦しも知らないでしょうし、あなたはまだ救われていないんじゃないかと思います。是非、今日、その救いをまだ本当に分かっていたら、受け取ってなかったら、是非このチャンスに受け取って欲しいと思います。最後に祈りたいと思います。